

保健室前廊下の掲示物を活用した保健指導のあり方について

—生徒のヘルスリテラシー向上を目指した養護実践—

教職実践専攻・教育実践開発コース
学籍番号 19GP507 氏名 谷垣 花

1 はじめに

近年、少子化・情報化等による社会環境・生活環境の変化により、児童生徒の健康問題は多様化・複雑化している。それに対して、養護教諭は児童生徒の健康実態の把握に努め、教職員、保護者らの健康に関する要望を日々の活動の中で捉えながら、保健指導を展開している。保健指導の際に活用する媒体として、保健だよりや掲示物がある。特に掲示物は、「中学校施設整備指針」において、保健室が「健康に関する情報を伝える掲示板を設置するなど、健康教育の中心」となるよう示されている¹⁾ように、健康教育の一角を担うものとして挙げられる。掲示物は、学校教育目標や学校保健目標、保健室経営のねらいの達成を目指し、校種を問わずほとんどの学校で作成されている。また、各学校の健康実態等を踏まえた養護教諭の工夫が凝らされ、多様な実践報告がなされている。しかし一方で、掲示物の効果や効果的な掲示物の要素に関する詳細な研究は少ない²⁾。

令和元年度のA中学校における保健室来室生徒対応時の観察から、「健康行動の実践に対する他律的な姿勢」が生徒の課題として考えられた。例えば、保健室に来室した生徒に養護教諭が問いかけた際に、教員に勧められ来室したが、自身で課題を明確化できず、望ましい健康行動を自ら選択することが難しいという場面があった。この課題に対し、生徒が自らの心身を自律的に捉え、健康行動の自己決定ができるようになることが必要であり、保健指導が重要だと考える。保健指導を通して、健康に関する知識や健康行動の定着を図るためには、第一に、生徒が自らの体や健康に興味・関心をもち、目を向けることが重要である³⁾。そのため、生徒が掲示物を通して、心身の健康に関して興味・関心をもてるよう工夫をすることが、掲示物を作成する際の重点の一つとして挙げられる。生徒の心身の健康に対する興味・関心を喚起し、提示される情報の中から必要なものを選択・活用する経験をすることで、生徒の健康行動に対する自律性を育むことができると考える。

そこで本研究では、掲示物を通して生徒の健康への興味・関心を喚起し、生徒のヘルスリテラシー向上に努める。最終的に、生徒が提示される多様な健康情報の中から、自身の実態に即した有用な情報を選択し、健康行動を実践できるようになることを目指す。

なお、本研究における『養護実践』は、養護教諭の専門性を活かした諸活動のうち、児童生徒の発育・発達の支援のため、目的意識をもって意図的に働きかけるものを指す⁴⁾。『保健指導』は、児童生徒が身近な生活における具体的な健康問題に適切に対処し、健康な生活が実践できるようになることを目指して行われる個別及び集団の指導を指し⁵⁾、『掲示物』は、保健指導の際に媒体として、掲示して活用されるものである。また、『ヘルスリテラシー』は、「健康を保持増進するために、情報を得て理解し、利用するための動機づけと能力を決定する認知的・社会的スキル」⁶⁾である。

2 令和元年度の研究の経過

(1) 仮説の設定

掲示物を活用した保健指導を通して健康に対する自律性を育むためには、第一に、生

徒が興味をもちながら掲示物を見ることが必要である。興味をもつことで、掲示内容と自身の体・健康とを照らし合わせることができるようになり、知識や健康行動の定着につながると考えられている⁷⁾。このことを踏まえ、本研究における仮説を、「①生徒の掲示物に対する興味・関心に働きかける要素、②生徒の健康実態・健康課題に即した要素、③取得した健康情報を活用する要素を含んだ掲示物は、生徒の健康に対する興味・関心を喚起し、ヘルスリテラシーを向上させる」とした。

(2) 令和元年度プレ実践（掲示物作成・掲示）について

1) 実践内容（実践期間：令和元年6月から令和2年1月）

掲示物のテーマは、生徒の健康実態や季節性を踏まえ、A中学校の養護教諭との相談のもと決定した。また、1か月に1回程度、掲示内容の更新を行い、合計7種類の掲示物を作成し、掲示した。

2) 観察による生徒の反応の様子

(i) 調査対象：掲示物を見ている生徒のうち、観察ができた生徒35名（15組）。

(ii) 方法及び内容：自作の観察記録用紙を用い、観察した内容を記録した。調査期間は令和元年10月17日から12月19日のうち、実習があった11日間とした。観察項目は、「観察した日時」、「生徒の学年・性別・人数」「生徒が掲示物を見ていた時間」、「生徒の会話・行動」である。

(iii) 分析方法：Microsoft Office Excel[®]2016を用いて、単純集計、平均値の算出を行った。また、生徒の会話記録を整理し、生徒の興味・関心を喚起する掲示物の要素に関するキーワードを抽出した。

3) 結果及び考察

1年生11名、2年生10名、3年生14名であった。また、生徒が掲示物を見る時間の平均は70.4秒、最長は156.0秒、最短は8.0秒であった。この観察記録から、興味・関心を喚起する要素として「定期的に掲示物の内容が変化すること」、「生徒がゲーム感覚で参加できる部分があること」等が考えられた。

(3) 生徒の実態調査（事前調査）について

1) 調査方法

(i) 調査対象：A中学校令和元年度第1学年と第2学年の生徒401名。回収率94.8%（380名）、有効回答率94.0%（377名）であった。

(ii) 方法：選択肢式質問紙を作成し、学級担任による間接配布法で実施した。説明資料を作成し、学級ごとの統一性を確保した。調査日は令和2年1月20日であった。

(iii) 調査内容

①対象者の属性、健康観、保健室前廊下の掲示物に対する認知について

属性については、対象者の「学年」及び「性別」を尋ねた。また、健康観については「自分はとても健康だと思う。」の1項目を「1. とても健康」から「4. 健康でない」の4件法で回答を求めた。掲示物に対する認知については、「掲示されていることを知っている」等の自作した3項目を尋ねた。

②見たいと思う掲示物の要素について、令和元年度プレ実践をもとに自作した、「見た目がカラフルなもの」、「自分の生活に役立つようなもの」等の15項目を「1. あてはまらない」から「4. とてもあてはまる」の4件法で回答を求めた。

③ヘルスリテラシーについて(CCHL尺度):石川ら⁸⁾の開発したCCHL尺度を用い、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。得られた回答を加算し対象者の「ヘルスリテラシー得点」とした。

(iv) 分析方法：IBM SPSS 25.0 for Windowsを用い、記述統計量の算出、Kruskal-Wallis検定、Dunn-Bonferroni法による多重比較を行った。有意水準は5%とした。

(v) 倫理的配慮：研究の概要を紙面にて説明し、同意の得られた生徒を対象にアンケートを実施した。説明にあたっては、研究の目的、回答を拒否しても不利益がないこと、個人情報を守られることを伝えた。

2) 結果及び考察

(i) 令和元年度ヘルスリテラシー得点について

全体のヘルスリテラシー得点平均は 20.4 ± 3.3 点であった。対象者をヘルスリテラシー得点のパーセンタイル値により3群(33.3パーセンタイル値未満:10.0–18.9点, 66.6未満:19.0–21.9点, 66.6以上:22.0–25.0点)に分け、高い順に「ヘルスリテラシー上位群」、「ヘルスリテラシー中位群」、「ヘルスリテラシー下位群」とした。

(ii) ヘルスリテラシー得点と掲示物の要素の関連について

ヘルスリテラシー得点群別の、見たいと思う掲示物の要素の差を検討するため、Kruskal-Wallis検定により各群の中央値の差の検定を行い、3群間で有意差が認められたものはDunn-Bonferroni法を用いて多重比較を行った。作成した15項目のうち、14項目で有意差が認められた。ヘルスリテラシー得点が高いほど、「生活に役立ちそうなもの」、「健康についての情報・豆知識が得られる」等の要素を含んだ掲示物を見たいと思う傾向が強くなることが明らかになった。このことから、生徒の健康実態・健康課題に即していることや、生徒が実践しやすい健康に関する知識を取り入れることは、掲示物を作成するうえで重要な要素だと考えられた。

3 令和元年度アンケート調査項目の因子分析

(1) 分析方法

令和元年度のアンケート調査から、自作した「見たいと思う掲示物の要素」15項目を、IBM SPSS 25.0 for Windowsを用いて因子分析を行った。なお、令和元年度実施のアンケート調査の調査対象及び時期は、「2 令和元年度の研究の経過 (3) 生徒の実態調査について」に前述している。

(2) 結果と考察

見たいと思う掲示物の要素に関する15項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。共通性が0.16以上の項目、因子負荷量が0.30以上の項目を採用し、固有値の減衰状況と因子のスクリープロットから4因子を採択した。因子の命名について、第1因子を、イラスト等掲示物の見た目に関する因子「視覚性」とした。第2因子を、季節性や学校行事等生徒の生活と掲示内容の共通性に関する因子「生活密着型の健康情報」とした。第3因子を、掲示物を見た生徒の行為、直接的な関わりに関する因子「参加可能性」とした。第4因子を、内容の理解しやすさや掲示内容の実現可能性の見込みに関する因子「実用性」とした。

因子分析から明らかになった因子を「実践の視点」とし、令和元年度に設定した研究仮説を照らし合わせた。「イラストがたくさんあるもの」などの項目が含まれる第1因子「視覚性」と、「ゲームのように参加できるもの」等の項目が含まれる第3因子「参加可能性」は、仮説①「掲示物に対する興味・関心に働きかける要素」と関連すると考える。また、第2因子「生活密着型の健康情報」は、仮説②「生徒の健康実態・健康課題に即した要素」と関連し、第4因子「実用性」は、仮説③「取得した健康情報を活用する要素」と関連すると考える。この結果を実践(掲示物作成)の視点として用いた。

4 令和2年度の実践と研究的取り組み

(1) 令和2年度本実践（掲示物作成・掲示）について

1) 実践内容（実践期間：令和2年6月から令和3年1月）

掲示板の構成について、今年度の実践ではA中学校の保健室前にある掲示板を「掲示板1」、「掲示板2」のように分けて構成した（図1）。令和元年度の観察調査から、

生徒の掲示物に対する興味・関心を喚起する要素として「定期的に掲示物の内容が変化すること」が考察された。このことを踏まえ掲示板を（図1）のように分けることによって、より多くの種類の掲示物を作成、掲示し、掲示内容が変化する機会を増やした。今年度、本実践として作成した掲示物は、合計12種類であった。作成した掲示物のテーマ、掲示期間、指導目標を一部抜粋し（表1）に示した。

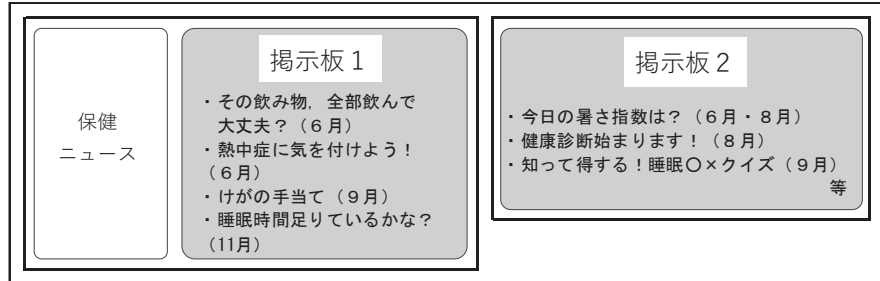


図1 掲示板の構成

表1 本実践で作成した掲示物について（一部抜粋）

テーマ	けがの手当ては いそがず あわてず 落ち着いて	睡眠時間 足りているかな？ ～睡眠時計をチェック！～
掲示物		
掲示期間	令和2年9月17日（木）～	令和2年11月17日（火）～
掲示場所	掲示板1	掲示板1
指導目標	発生頻度の高いけがを取り上げ、その状態や手当ての方法を学ぶことで、生徒自身が可能な範囲で手当てを行うことができる。	睡眠時間を評価する時計を動かし、自らの睡眠時間を評価することで、睡眠習慣を見直し、改善のための行動をとることができる。

2) 作成した掲示物の分類について

掲示物の分類について、令和元年度のプレ実践及び令和2年度の本実践で作成した掲示物の内容からキーワードを抽出し、3つの視点に基づいて分類を行った。分類に用いた(A)から(C)の定義を（表2）に示した。また、令和2年度の本実践において作成した掲示物とその分類を（表3）に示した。

令和元年度のプレ実践で作成した「熱中症からからだを守る」と本実践で作成した「熱中症に気を付けよう（表3）の3）」はともに、熱中症とその予防に関する掲示物である。このように、プレ実践と本実践で同様のテーマを用いている掲示物は、その時の生徒の実態と実態を踏まえた作成者の願い、指導目標等をもとに作成しているものであり、同じテーマでも切り口の異なる内容、構成をしている。

表 2 掲示物の分類 (A) (B) (C) の定義

(A) 作成目的による分類	
a) 学習	知識・技術を身につけることを目的としたもの。
b) 行動実践	掲示内容を実際に行うことを促すもの。
c) 注意喚起	掲示内容をもとに生徒の諸活動に注意を促すもの。
d) 広報	生徒に周知が必要な内容を示したもの。
(B) 読む人の行為による分類	
a) 読む	内容が文章によって表現されているもの。
b) 触る	掲示内容に触ることを促す仕掛けがあるもの。
c) めくる	掲示物をめくることで内容が読める仕掛けがあるもの。
d) 貼る	シールを貼る等、掲示内容に参加する仕掛けがあるもの。
e) ゲームをする	クイズやトレーニングを通して掲示内容に参加する仕掛けがあるもの。
(C) 関連項目による分類	
a) 季節	気温や天候等、特徴的な環境と関連があるもの。
b) 行事	学校行事や部活動等の実施状況と関連があるもの。
c) 流行	感染症の流行等、関心度が高い事象と関連があるもの。

表 3 令和 2 年度に作成した掲示物とその分類

令和 2 年度掲示物テーマ	生徒の健康実態・課題	(A) 作成目的による分類				(B) 見る人の行為による分類					(C) 関連項目による分類			
		a) 学習	b) 行動実践	c) 注意喚起	d) 広報	a) 読む	b) 触る	c) めくる	d) 貼る	e) ゲームをする	a) 季節	b) 行事	c) 流行	
1 今日の暑さ指数は？	外での体育活動の増加、熱中症予防 等		○	○		○						○	○	
2 その飲み物、全部飲んで大丈夫？	熱中症予防のための水分補給 等	○	○			○	○					○	○	
3 熱中症に気を付けよう！	体育活動の増加、熱中症症状の増加 等	○	○			○		○				○	○	
4 健康診断始まります！ ～保健室から3つのお願い～	健康診断の実施、感染症予防策 等				○	○								○
5 今日の暑さ指数は？ ～校庭・体育館バージョン～	外での体育活動の増加、熱中症予防 等		○	○		○						○	○	
6 けがの手当て ～いそがず あわてず おちついて～	保健室来室傾向より(けがの件数増加)	○	○			○				○		○	○	
7 目の体操をしよう！	保健室来室傾向より(目の疲れ、頭痛、肩こりの訴え)		○			○				○				○
8 睡眠時間 足りているかな？ ～睡眠時計をチェック！～	保健室来室傾向より(休校期間中の生活習慣)	○	○			○	○	○	○					○
9 知って得する！ 睡眠〇×クイズ	保健室来室傾向より(休校期間中の生活習慣)	○	○			○		○		○				○
10 症状を比べよう！ 「新型コロナ」「インフル」「かぜ」	アンケート調査自由記述より(新型コロナウイルス感染症への関心)	○		○		○								○
11 健康おみくじ ～2021年バージョン～	アンケート調査自由記述より					○		○		○		○	○	
12 心と体は元気かな？ ～ストレス度チェックをしよう！～	保健室来室傾向より	○	○			○		○				○	○	

(2) 令和 2 年度アンケート調査について (事後調査)

1) 調査方法

(i) 調査対象：A 中学校の令和 2 年度第 2 学年及び第 3 学年の生徒 401 名。なお、本調査対象者は、令和元年度のアンケート調査対象者と同集団である。回収率 92.0% (369 名)、有効回答率 100.0% (369 名) であった。

(ii) 方法：選択肢式と自由記述式を併用した質問紙を作成し、学級担任による間接配布法により実施した。配布にあたって、説明資料を作成し学級ごとの統一性を確保した。調査日は令和 2 年 12 月 2 日とした。

(iii) 調査内容

対象者の属性、健康観、掲示物の対する認知を問う項目ならびに、ヘルスリテラシーに関する 5 項目、見たいと思う掲示物の要素に関する 15 項目は、「2 令和元年度の研究の経過 (3) 生徒の実態調査 (事前調査)」と同様のものを用いた。また、これまでに見た掲示物に対する感想や意見等を自由記述式で尋ねた。

(iv) 分析方法：IBM SPSS 25.0 for Windows を用い、記述統計量、標準偏差及び相

関係数の算出，t検定，因子分析，重回帰分析を行った。自由記述は意味内容の同質性に基づき分類を行った。自由記述の分析にはKH Coder (Ver.3)⁹⁾を用い，対応分析（コレスポンデンス分析）を行った。

(v) 倫理的配慮：研究の概要を紙面にて説明し，同意の得られた生徒を対象にアンケートを実施した。説明にあたっては，研究の目的，回答を拒否しても不利益がないこと，個人情報を守られることを伝えた。

2) 結果

(i) ヘルスリテラシー得点について

全体のヘルスリテラシー得点平均は21.0±3.6点であった。対象者をヘルスリテラシー得点のパーセンタイル値により3群に分けた(33.3パーセンタイル値未満:5.0-19.9点, 66.6未満:20.0-22.9点, 66.6以上:23.0-25.0点)。リテラシー得点が高い順に「R2ヘルスリテラシー上位群」, 「R2ヘルスリテラシー中位群」, 「R2ヘルスリテラシー下位群」とした(以下, 「上位群」, 「中位群」, 「下位群」)。ヘルスリテラシー得点平均について, アンケート実施年度によって対象者を「令和元年度実施群」と「令和2年度実施群」に分け, 対応のないt検定を行った。結果, 調査実施年度別のヘルスリテラシー得点平均間に有意な差がみられた($t(744)=2.37, p<0.05$)。

表4 令和2年度 見たいと思う掲示物の要素に関する因子分析 (n=369)

質問項目	因子負荷量			固有値	α係数	
	因子1	因子2	因子3			
造形的な工夫	かわいいイラストが多いもの。	0.733	-0.103	0.118	5.492	0.848
	イラストがたくさんあるもの。	0.716	0.198	-0.260		
	めくったり, 動かしたりできるもの。	0.684	-0.001	0.042		
	ゲームのように参加できるもの。	0.682	-0.065	0.103		
	手作り感が感じられるもの。	0.639	0.001	0.068		
	感想やコメントを書くコーナーがあるもの。	0.449	-0.258	0.243		
見た目がカラフルなもの。	0.423	0.224	0.062			
実用性	自分の生活に役立ちそうなもの。	-0.044	0.718	0.009	2.041	0.792
	読んでいてわかりやすいもの。	0.014	0.714	-0.121		
	健康についての情報や豆知識が得られるもの。	-0.078	0.530	0.342		
	内容が面白そうなもの。	0.324	0.491	0.049		
	身近な話題と関係のある内容のもの。	0.036	0.446	0.375		
の生 関活 連と	学校行事と関係があるもの。	0.114	0.042	0.544	1.049	0.585
	季節と関係のある内容のもの。	-0.161	0.377	0.505		
	保健だよりの内容と関係があるもの。	0.162	0.131	0.331		
因子間相関						
因子1 因子2 因子3						
因子1 (造形的な工夫)						
—						
因子2 (実用性)						
0.347 —						
因子3 (生活との関連)						
0.534 0.477 —						

(ii) 掲示物への興味・関心に影響を与える項目の因子分析

見たいと思う掲示物の要素に関する15項目について, 主因子法, プロマックス回転による因子分析を行った(表4)。共通性が0.16以上の項目, 因子負荷量が0.30以上の項目を採用し, 固有値の減衰状況と因子のスクリープロットから3因子を採択した。

因子の命名について、第1因子を、掲示物の見た目や仕掛け等掲示物のつくりに関係する因子「造形的な工夫」とした。第2因子を、内容の理解しやすさや掲示内容の実現可能性の見込みに関する因子「実用性」とした。第3因子を、季節性や学校行事等生徒の生活と掲示内容の関連についての因子「生活との関連」とした。

(iii) ヘルスリテラシー得点群別の重回帰分析

ヘルスリテラシー得点に影響を与える項目を検討するために、見たいと思う掲示物の要素に関する3因子「造形的な工夫」、「実用性」、「生活との関連」を独立変数として強制投入法及びステップワイズ法による重回帰分析を行った。ヘルスリテラシー得点を従属変数とした結果、調査対象者全体で見ると「実用性」と「生活との関連」の2因子が正の影響を示しており、ヘルスリテラシー得点を向上させる独立変数として挙げられた(表5)。またヘルスリテラシー得点群別に見ると、すべての群で「生活との関連」が正の影響を示していた。一方で「下位群」では「造形的な工夫」が負の影響を示していることが分かった。

表5 ヘルスリテラシー得点に影響を与える項目(重回帰分析)

独立変数	全体		上位群		中位群		下位群	
	B	β	B	β	B	β	B	β
第1因子(造形的な工夫)							-1.659	-0.340 **
第2因子(実用性)	1.765	0.210 **						
第3因子(生活との関連)	0.932	0.153 *	0.256	0.171 *	0.395	0.265 **	1.711	0.382 **
決定係数	0.106		0.029		0.070		0.106	
自由度調整済み決定係数	0.101 ***		0.022 *		0.063 **		0.088 **	
N	369		139		128		102	

注1) 従属変数: R²ヘルスリテラシー得点 注2) *p<0.05,**p<0.01,***p<0.001 注3) Bは偏回帰係数,βは標準偏回帰係数

表6 カテゴリごとの自由記述(一部抜粋)(n=194)

カテゴリ名	記述内容例
全体的な感想 (n=43)	<ul style="list-style-type: none"> 保健室前の掲示物は健康のためになり役に立つのでありがたいと思っている。 通りかかった際に、暇つぶしとして見れるので良いと思う。 いつも楽しませてもらいました。興味深いものから知っていて得するものまでありました。
特定のテーマへの感想 (n=59)	熱中症に気を付けよう (令和2年度 6月) ・熱中症についての掲示物がとても役に立ち、ゲームのように参加できたのも楽しかった。 ・熱中症の時のすべきことが印象に残っている。
	けがの手当て (令和2年度 9月) ・けがをしたときの処置の仕方が印象に残った。 ・手袋に傷をつけて、けがを再現している模型が印象に残っている。
	目の体操をしよう! (令和2年度 10月) ・目の体操のやつが特に印象に残っています。 ・目だけで数字を数えるやつが楽しいので印象に残っています。
特定の掲示形式への感想 (n=67)	睡眠時間 足りているかな? (令和2年度 11月) ・子供に必要な睡眠時間が掲示されているのが面白かった。時計を自分で回して何時間寝ているのかわかることができた。 ・自分の睡眠時間の短さが分かった。カードの裏に書いてあることをやってみようと思いました。
	イラストの工夫 ・保健室前の掲示物がカラフルで、イラストとかがかがいてあって見やすかったし、とても分かりやすかったです。
	クイズ形式 ・クイズ式だったり遊びながらも、健康について知れて楽しいし、面白いので続けてほしいです。
	参加可能な要素 ・見るだけでなく、自分で番号を見ついたり、めくったり、クイズだったり楽しかった。 ・最近のシールを貼るやつは、みんなが参加できるものでとても面白いと思った。
掲示内容の要望 (n=17)	内容の定期的な変化 ・今月はどんな掲示物があるのだろうと楽しみにしている。 ・職員室に行くときに変わっているとついついやっちゃって楽しんでます!
	めくったり動かししたりする仕掛け ・めくったり、動かししたりするのが面白いし、内容が入ってくるから一石二鳥かと思う。 ・動かししたりできる掲示物が多くの人が立ち止まって興味を持ってみると思う。
掲示形式の要望 (n=8)	・もっと豆知識を知りたい。 ・コロナについての掲示物を見たい。 ・身近な病気に関するもの、意外と知らない健康への知識等の掲示物が見たかった。 ・内容は面白くて好きだけれど、時間がない時に見ることもあるので、ぱっと見くらいの短さで分かりやすいと思います。 ・素通りしている人が多いからもっとわかりやすく。

(iv) 掲示物に対する感想・意見等の自由記述のカテゴリ分け

掲示物に対する感想や意見等について自由記述式で回答を求めた（有効回答数：194名）。有効な回答が得られたものを意味内容の同質性に基づいてまとめ、5つのカテゴリに分類した（表6）。第1カテゴリは、「自分の生活に役立った。」「通りがかりに暇つぶしとして見ることができ、良いと思う。」等の掲示物全体に関する感想をまとめた「全体的な感想」である。第2カテゴリは「熱中症」や「目の体操」等、特定の掲示物への感想を述べている「特定のテーマへの感想」である。第3カテゴリは「クイズ式」、「めくったり動かしたりする」等、特定の掲示形式、仕掛けに対する感想を述べている「特定の掲示形式への感想」である。なお、「形式」は（表2）の「(B) 見る人の行為による分類」と同様の意味である。第4カテゴリは、「もっと豆知識が知りたい」、「コロナについて知りたい」等、見たい掲示物のテーマを挙げている「掲示内容の要望」である。第5カテゴリは、「ぱっと見くらしいの短さで」や「もっとわかりやすく」等、掲示物の形式への要望を挙げている「掲示形式の要望」である。

(v) ヘルスリテラシー得点群別の自由記述の対応分析について

自由記述は総抽出語数2,801語であり、助詞や助動詞を除いた使用語数は957語、異なり語数は437語であった。強制抽出語として「豆知識」、「熱中症」、「目の運動」、「目の体操」の4語を設定し、すべての抽出語から助詞、助動詞、感動詞等を除いた、意味の異なる253語を分析に用いた。自由記述から抽出した語の、ヘルスリテラシー得点群別の特徴を見た対応分析の結果を（図2）に示した。なお（図2）は、分析結果のうち原点付近を拡大し、図示したものである。調査対象者のうち、自由記述があり「上位群」であったのは66名、「中位群」78名、「下位群」50名であった。（図3）より、原点から見て「上位群」、「中位群」、「下位群」それぞれの方向にあり、かつ原点から離れている語ほど各群に特徴的な語であると読み取ることができた。「上位群」の自由記述に特徴的な語として「楽しい」、「分かる」等の語が挙げられ、「下位群」に特徴的な語として「キャラクター」、「シール」等の語が挙げられた。

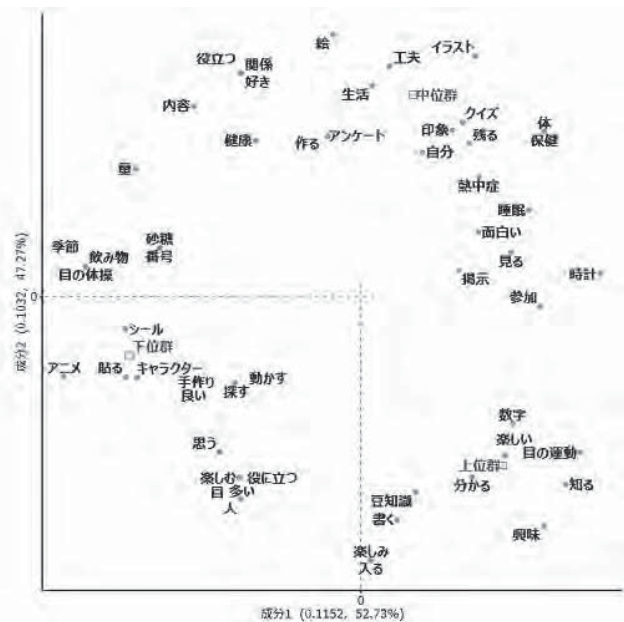


図2 ヘルスリテラシー得点群別の対応分析

5 考察

保健室前の掲示物作成は、子どもの健康実態をはじめ、内容、平面構成等様々な要素を勘案しながら、養護教諭が目的・意図をもって行う養護実践¹⁰⁾のひとつであり、学校における健康教育の一角を担うものとして挙げられる¹⁾。江口は、健康教育は望ましい健康行動を達成するために重要な要素（高レベルのヘルスリテラシーとモチベーション）を支援するための基盤であると述べており、健康教育とヘルスリテラシーの関係の深さが窺える¹¹⁾。本研究では、生徒の健康への他律的姿勢を課題として挙げ、健康に対する自律性を育むため、「健康への興味・関心、健康行動を喚起する掲示物作成条件を明らか

にする」ことを目指した。実践を評価するにあたり、指標としてCCHL尺度によって算出されるヘルスリテラシー得点を用いた。

(1) 保健室前廊下の掲示物が生徒のヘルスリテラシーに与えた影響について

令和元年度に実施した事前調査と令和2年度に実施した事後調査において、生徒のヘルスリテラシー得点はそれぞれ、 20.4 ± 3.3 点、 21.0 ± 3.6 点となり、有意な差が見られた ($p < 0.05$)。また、ヘルスリテラシー得点を従属変数とした重回帰分析の結果、ヘルスリテラシー得点に正の影響を与える独立変数として「実用性」($p < 0.01$)、「生活との関連」($p < 0.05$)が挙げられた。このことから、内容が読み手にとって身近で、有益であると感じられる掲示物はヘルスリテラシーを向上させる一助となると考える。一方でヘルスリテラシー下位群では「造形的な工夫」因子がヘルスリテラシー得点に対して負の影響を示していた ($p < 0.01$)。また、自由記述の対応分析から、下位群に特徴的な語として「キャラクター」や「シール」が挙げられていた。これらを踏まえ、特にヘルスリテラシー下位群において「造形的な工夫」は、掲示物そのものへの興味・関心を喚起するが、掲示物の見た目や仕掛けの楽しさに引き付けられ、掲示されている内容を読み、理解する段階に至らない。そのため、ヘルスリテラシーに対して負の影響を与えたと考える。

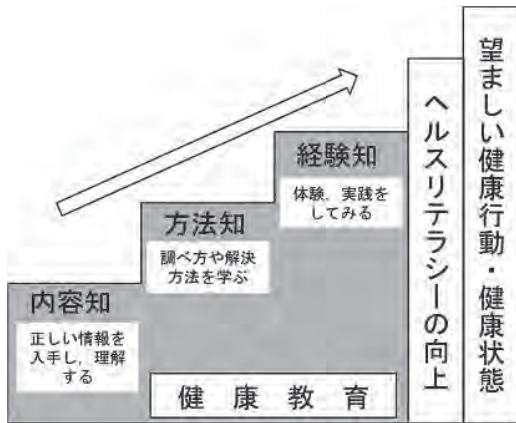
(2) ヘルスリテラシーを向上させる保健室前掲示物の要素について

重回帰分析の結果から、ヘルスリテラシーを向上させる掲示物の要素として「実用性」、「生活との関連」が、ヘルスリテラシーへの影響は示唆されなかったが掲示物そのものへの興味・関心を喚起する要素として「造形的な工夫」が考察された。また江口らは、(図3)に示すようにヘルスリテラシーを高める健康教育の手法を「内容知」、「方法知」、「経験知」の3つの段階を用いて述べている¹¹⁾。これらのことから、間接的な保健指導である掲示物もまた、江口らが述べている健康教育の段階を経てヘルスリテラシーに影響を与えていると考える(図4)。「造形的な工夫」は、色づかいの工夫やめくったり動かしたりする仕掛けを用いる等の要素が考えられる。ただし、この点に過度に力を入れると掲示物の見た目のみに引き付けられる可能性があることから、適切な工夫が求められる。「実用性が感じられる工夫」は、読み手の発達段階にあった文章量であることや、読み手が有益だと感じる情報や知識が盛り込まれていること等が考えられる。「身近さが感じられる工夫」は内容に季節感が感じられることや、話題性のある内容が盛り込まれている等の要素が考えられる。これらの要素はそれぞれ独立しているのではなく、一部分が重なり合っていると考える。例えば「実用性」と「身近さ」は、双方において生徒の健康実態・課題に即した内容の工夫が必要になるためである。

今回明らかとなった「実用性」や「身近さ」の要素は、ヘルスリテラシーを高める健康教育の段階のうち、「内容知」、「方法知」に相当することが考えられる。それまでに蓄積した知識を活用するためには、学んだ内容を実際に体験する「経験知」が必要である。そのため、掲示物を通して経験や実践を促す工夫について深く考察することが今後の課題と言える。

養護教諭が作成する掲示物は、掲示を通して保健教育を行う目的をもつ¹²⁾間接的な保健指導である。それと同時に、掲示物を見る生徒に声かけをする、救急処置活動の際に活用する等、直接的な保健指導と密接な関係をもっていると考える。例えば本実践では、掲示物を見る生徒に声をかけ、一緒に仕掛けに参加したり、掲示されていない部分を補足したりすることで、生徒の「なるほど」という深い理解や、健康行動への意欲を引き出すことができたと考える。掲示物や保健だより等の間接的保健指導と直接的保健指導の関連について、鎌塚ら¹³⁾は、養護教諭が保健だよりを発行する際に行う工夫の一つと

して、保健教育への活用を挙げている。保健だよりを配布する学級担任が、保健だよりを活用し保健指導につなげることで効果的な保健教育が行われることを示唆している。また、人見ら¹⁴⁾は、小学校理科（人体の構造、呼吸と循環）と保健体育科（発育・発達、喫煙の害）を組み合わせた授業実践を通して、内容の関連がある教科等横断的な取り組みが、学習者の理解の深まりを促すことを示唆している。これらを踏まえ、より効果的な掲示物による保健指導を行うために、保健学習の内容や、生徒が現在学習している他教科の内容を効果的に活用し、掲示内容を深めることが重要だと考える。



（文献 11 より、江口の記述をもとに筆者が作図）

図 3 ヘルスリテラシーを高める健康教育¹¹⁾

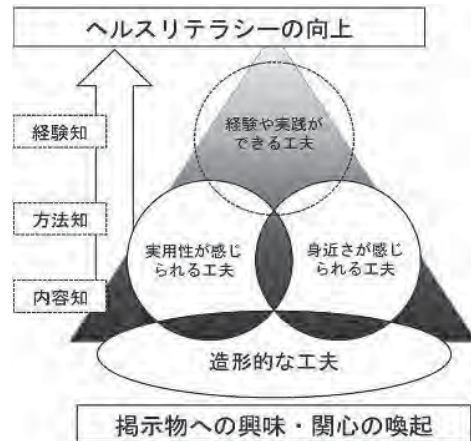


図 4 ヘルスリテラシーを向上させる掲示物の要素について

6 まとめ

生徒のヘルスリテラシー得点は令和元年度と令和2年度で有意な差が見られ、掲示物を用いた保健指導がある程度の正の影響を与えていることが明らかになった。一方で重回帰分析の結果、自由度調整済み決定係数が低値であったことから、ヘルスリテラシーに影響を与えるものとして、掲示物による保健指導以外の健康教育もあることが示唆された。

ヘルスリテラシーに対して正の影響を与える掲示物の要素として、健康実態に即しており、読み手が有益だと感じる情報や知識が盛り込まれていることや、身近な情報との関連があること等が考察された。今後も掲示物に関する実践を継続していくとともに、読み手の経験や実践を促す工夫について考察を深めていく。

最後に、本研究を進めるにあたりご協力くださいました、A中学校の生徒・教職員の皆様に心から御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2019), 中学校施設整備指針, 28
- 2) 斉藤ふくみ (2012), 養護実習事前学習としての保健室掲示物作成に関する一考察, 茨城大学教育実践研究 31, 203-211
- 3) 文部科学省 (1997), 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について, 23
- 4) 日本養護教諭教育学会 (2019), 養護教諭の専門領域に関する用語の解説集 (第3版), 10
- 5) 衛藤隆, 岡田加奈子 (2015), 学校保健マニュアル 8 版, 南山堂, 99
- 6) 山本浩二, 渡邊正樹 (2011), 日本の中学校健康教育における課題とヘルスリテラシーの必要性に関する一考察 - 中学校新学習指導要領の実施に向けて -, 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系 68, 87-97
- 7) 「健康教室」編集部 (2011), 保健だよりと掲示物 保健室から発信する健康教室の形 62 (13), 62-70
- 8) 福田洋, 江口泰正 (2018), ヘルスリテラシー - 健康教育の新しいキーワード - 初版, 大修館書店, 50
- 9) 樋口耕一 (2004), テキスト型データの計量的分析 - 2つのアプローチの峻別と統合 - 『理論と方法』, 数理学会 19(1), 101-115
- 10) 前掲書 7), 62
- 11) 前掲書 8), 58-69
- 12) 静岡県養護教諭研究会 (2019), 養護教諭の活動の実践 第3版, 東山書房, 221
- 13) 鎌塚優子, 林典子, 鈴木恵子, 下村淳子, 井澤昌子 (2016), 小学校における養護教諭の保健だより作成の実態, 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学編) 66, 225-238
- 14) 人見久城, 久保元芳, 森田香緒里 (2018), 教科横断的視点に基づく小学校教員養成カリキュラムの開発のための教科間連携研究 (2) - 理科と体育科・保健体育科の連携授業 -, 宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号, 255-258